川とともに生きるまち

マイプライベートタイム

四万十（しまんと）市長（高知県）　中平正宏（なかひらまさひろ）

令和元年に実施された一條公家行列の様子

土佐の小京都中村

四万十市は、平成17年4月10日に旧中村市と旧西土佐村が合併し誕生しました。その名前の通り、四万十市中心部中村には中央を四万十川、西に中筋川、東を後川と3本の1級河川が貫流する、日本でも大変珍しい地域です。

本市の紹介を少しさせていただきます。中心地中村は今から500年以上前に、応仁の乱で先の関白一條教房（いちじょうのりふさ）公が下公し造ったまちです。道路は、碁盤の目状に整備され、京町通り、一条通、大橋通など京に付した名前になっています。

市の花は藤で、一條家の家紋と一緒です。また、間崎地区では大文字の送り火も行っています。

5月には一條公家行列、7月には市民祭・なかむら踊り、8月にはジョロウグモ大会、花火大会、9月にはよさこい四万十、不破八幡宮大祭、10月には四万十川100kmマラソン、11月には土佐の三大祭りの一つである一條大祭など、1年を通して楽しめるイベントがいっぱいです。

3年ぶりに開催されたなかむら踊り（市役所正調踊り子チーム）

そして特に、四万十川に代表される、山、川、海の影響を受け、居酒屋、料亭、スナック、バー、ラウンジなどが庁舎の周りにはたくさんあります。市外から来ていただいたほとんどの方々に、料理がおいしかったと言っていただけることは、市長として大変うれしく思います。

古き良き時代の思い出

平成の大合併当時、私は旧西土佐村の村長をしていました。2回の住民投票を行い、1回目は、4市町村で賛成1660人、反対879人、この結果でほっとしたわけですが、二つの町が住民投票・アンケートで反対となり、白紙となりました。改めて中村市、西土佐村で法定協議会を立ち上げ、2回目の住民投票を行いました。賛成1383、反対1270、わずか113票差で合併が決定いたしました。17年1月4日告示9日投票であり、31全集落でマイクを握り、合併の必要性を訴えましたが、反対の議員さんからは独裁者と言われたことが懐かしく思い出されます（2年後にはその議員さんとも仲直りをいたしました。今

中村市・西土佐村　合併協定調印式（筆者：右から2番目）

四万十川に架かる赤鉄橋

は天国からしっかりやれと見ていただいているように思います）。今思い出しても、あの時のエネルギー、パワーはどこから出たのかと考えます。何も怖いものがない若さだったかもしれません。市長になって10年目になりますが、図書館の民間委託、保育所の民営化、中学校の統合問題、太陽光発電など、難しい、厳しいことがありましたが、四万十市の誕生時と比べると全然苦にはなりません。

時間がゆっくりと動いていたあの頃

私の実家は、河口から40㎞以上も上流にある四万十川の支流、目黒川沿いにあります。川まで歩いて50ｍくらいであり、小学校、中学校の時に春から秋まで川と共に育ったといっても過言ではありません。春は4月からウナギ漁（ごんぶり漁、延縄（はえなわ）漁、ころばし漁）夏から鮎漁、手長エビ、秋にはツガニ漁と1年を通し、同じサイクルで川遊びをしながら、生活をしていたように思い出されます。当時は前の川に行けばおかずはいくらでも捕れたので、一週間に何回も鮎やウナギを食べていました。今思えばすごくぜいたくでした。

実家

ただ50年の年月を経て、比べ物にならないぐらい、鮎、ウナギ、エビなどが少なくなりました。原因の一つが、人口が減少することで山の手入れなどができなくなり、荒れた山林が多くなっていることだと思います。また、水田なども耕作放棄地が多くなっています。同時に、イノシシ、鹿、猿など、害獣は爆発的に増えています。私が通った母校、須崎小学校、大宮中学校は、現在は廃校となりました。日本全体が、人口減少・少子高齢化へ向かう中、地方創生の取り組みを進めておりますが、新型コロナウイルス、ロシアのウクライナ侵攻による物価高騰という想定していなかったものとの戦いも、まだまだ道半ばであると考えております。

四万十川の天然ウナギ

私の好きな言葉は、為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。この言葉は武田信玄が元で、上杉鷹山が作った言葉だと思います。これからも何事も強い意志を持って、コロナで落ち込んだ地域経済の回復、大学の誘致や食肉センターの改築を実現するべく、前へ前へ進んでいきたいと思います。

四万十育ちの禁断の果実、四万十ぶしゅかんとぶ酎ハイ